

## 第5章 噛みモノ = カート

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	100
雑誌名	イエメンものづくり : モノを通してみる文化と社会
ページ	103-124
発行年	2001
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00017650">http://hdl.handle.net/2344/00017650</a>

## 第5章

---

# 噛みモノ || カート



カート・パーティー。カートの葉と、水とタバコとくつろげる場所があれば、いとも簡単に至福のときを過ごすことができる。(サナア旧市街にて)

こぶとり爺さん

イエメンを初めて訪れ、  
サナア旧市街を歩いた

人ならば昼下がりのスーク（市場）で店の男たちが揃いも揃ってこぶとり爺さんのように片方の頬をはちきれんばかりに膨らませている光景に驚かされ、これは風土病なのではないかと心配した経験があるにちがいない。翌日午前中に同じスークへ出かけてみれば昨日の男たちが普通の頬をして何事もなかったかのように仕事をしている。人間の顔の肉がこれほど伸び縮みするとは私もイエメンに行くまで知らなかった。これが「カート」である。そして「カートなし」にはイエメンは語れない。

カートは多年性のアカネ科の草木で、標



カートの売り買いは真剣そのものである。これは枝ごと買うカートで高級品とされる。（ハイマー近くにて）



枝先だけを集めて束ねてあるカート。バナナの幹に包まれて運搬される。枝つきカートよりは安価である。(サナア旧市街にて)

高千メートルから二千数百メートルの山岳地で栽培される。葉の形はお茶の葉に似ている、あるいは神社で神事に使う榊のようだという人もいる。この若葉を数十枚から数百枚（まれには数千枚）、噛みつぶしながら順々に口のなかに頬張り（まさに読んで字のごとく頬を張るほど詰め込む）、葉から徐々に滲み出るエキスを時折冷めたい水、あるいはコーラ等とともに飲み下す。ただしあくまで葉は頬に溜めるのであって、これ自体は飲みこまない。

カートは昼食後から日没までの、午後のくつろぎのひとときを過ごすための重要な社交の道具立てである。たいていは二時過ぎくらいから気心の知れたものどしが、仲間の誰かの家に集まって、水タバコなどをくゆらせながらおしゃべりしつつ、

カートを噛んで過ごす。

外国人は興味半分でイエメン人からカートの葉を二、三枚分けてもらい、試しに噛んでみて「苦い。青臭い。よくこんなものが噛めるものだ」と言いながらすぐに吐き出してしまふ。が、そもそもカートは一種の薬のようなものとしてイエメンに持ちこまれたものであり、苦いからこそ効きめもあるのだ。また生ものだから青臭くてあたりまえ。それにそもそもカートはゆっくり腰を落ちつけ、数時間かけてじっくり噛んで、「ごぶとり爺さん」状態になってこそ味わいの出てくるモノである。道端で立つたまま二、三枚噛んだところでカートの味などわかるうはずがない。

#### カートの役割

もちろん現在のカートの用途は薬ではなく、純粹な嗜好品である。強いて言うなら「社会の潤滑油」として用いられていると言つのが最も真実に近いであろう。イエメンの多くの男たちは毎日昼食後、友人、親戚などの家に三々五々集まってきてカートを噛みはじめ。コンクリートや漆喰塗りの床の上に絨毯を敷きつめた大部屋で、中央に水タバコ マダーア を配して、人々は壁にもたれてコの字形に座り、めいめい勝手におしゃべりをする。このカート・パーティーこそがイエメン社会の核であり、友人たちの社交場であり、親族の絆の結節点であり、商取引の成立する場であり、内

闇メンバーの決定される場なのである。敬虔なムスリムの多いイエメンでは公の場での飲酒の機会はほとんどないので、イエメンの男たちにとってのカートは日本人にとっての赤提灯であると言つて大過あるまい。

イエメン人にカートを何故噛むかと問えば「話が弾む」「頭が冴える」「眠気が覚める」「集中力が生じる」などの答えが返ってくる。実際に噛んでみればわかるが、噛みはじめで一時間もすると自分がおしゃべりになっていて、大胆なことを言っているのに気づく。アラビア語がひどく上達したような気になるのもこうしたときで、ビール二、三杯の「ほろ酔い加減」とまったく同じである。会話が相当盛り上がるのもこの段階である。ここにカートの社交的な性質がある。またカートを噛むにあたっては一枚一枚の葉を指先でしごいて汚れを落としてから口に運ぶので、手持ち無沙汰で間が悪いということもないから口下手な人間であつても不自由な思いをしないですむ。

それからさらに一時間ほど噛み進むと、幻覚とまではいかないが、一種恍惚とした感じが訪れる。「カートを噛めば東京が見えるぞ」とは日本人をカートに誘うときによくイエメン人の言つ言葉である。この段階が「頭が冴える」段階で、頭がかなりのスピードで回転しはじめ、人々は周りの人とおしゃべりよりも自分の頭に浮かんで消えていくさま

ざまなアイデアや思考を追うのに夢中と  
いった感じになる。こうして盛り上がった  
会話は徐々にひそめ、パーティーが  
始まってから三時間くらいたち、夕  
日が射してくる頃になると一座に気だる  
い倦怠感が広がり、時折誰かがコーラン  
の一節を唱えると皆がそれに唱和する。  
この倦怠感はいかに不快なものではなく、  
一つの時空間を共有しているという連帯  
感が根底にある。そうして一人去り、二  
人去りしてパーティーはなし崩しにお開  
きとなる。

この「カート空間の共有」の社会的意  
味は重大で、一度でもカートを一緒に嘸  
めば外国人でも友人 サディーク と認



結婚式もカートなしには始まらない。花婿を上座に据えての男だけの披露宴はカートがメインである。長いホースのついた水タバコを回し喫みする。(スラーにて)

識され、相手が政府の役人であれば次に役所で会ったとき、なにくれとなく面倒をみられる可能性はかなり高い。商人であれば取引の際、他の客よりも半歩ほど優位に立てるであらう。

本来カートはこのように集まって噛むものだが、一人で噛む場合もある。例えばタクシ―やトラックの運転手。彼らはヘアピンカーブの続く山岳道路を走るとき、「眠気覚まし」としてカートを噛む。運転しながらカートを噛むので、葉っぱを口に運ぶときにともすれば両手がハンドルから離れることがあり、横に乗っているとひやひやするのだが、居眠りされるよりはましと思うしかない。現にイエメンでは居眠り運転による事故は皆無である。それから学生の試験勉強のときにもカートが用いられることがある。「眠気は覚めるし、頭は冴えるし、夜勉強するのにうってつけ」とは多くの人の一致した意見である。

そしてスークの店々の主人たちは店番をしながら、また鍛冶屋、建具屋、銀細工屋なども「集中力を得て良い仕事をする」ために一人カートを噛みながらトンテンカン働いている。われわれはこれらの光景を見て最初に述べたように驚くことになるのである。

#### カートの歴史

カートの原産地はコーヒーと同じく紅海の対岸、アフリカのエチオピア周辺と言われており、イエメンに紹介されたのもやはりコーヒーと同時に



期の十三世紀頃とするのが定説となつてゐる。カートに関する最も古い記述は南部山岳地帯の中心地タイズ近辺の「ジャバル・ハバシ」(文字どおりの意味はエチオピア山)にカートがあつたことを示しているという。このジャバル・ハバシはイスラム教の神秘主義スーフィー教団の活動が盛んだつたところで、行者たちが勤行の際の眠気覚ましに用いはじめたという説には信憑性がある。これはイエメン中世のラスール朝(十三世紀半ばから十五世紀半ばまで南部イエメン、ティハマ地方を支配した)時代に相当する。

現在カートの習慣は南アラビア、東アフリカに広く分布しているが今日のイエメンほど誰でも、どこでも嘔むというところはない。ちなみに社会主義体制の旧南イエメンではカートは週末の木・金曜日のみ許されており、他の日に嘔むことは禁止されていた。またサウジアラビアでは宗教上の理由を付して全面的に禁止されており、嘔んでいる現場を見つかりと禁固十五年の刑が言いわたされると言われていた(これが最近緩和されたという噂がイエメン人の間に流れているが、真偽のほどは定かではない)。これ以外にもエチオピア(チャットと呼ばれる)、ソマリア、ケニア(ミツラと呼ばれる)、ウガンダ、マダガスカルなどでもこの習慣は現存するが、さほど生産量も多くなく、高価だということもあつて、主として特別な機会に嘔まれるのみであるようだ。

カートも当初はコーヒー同様イスラム神学を学ぶ学者、学生が夜を徹して勉学、勤行を行うときの眠気覚ましのための気つけ薬として供されていたらしいが、庶民に普及していくプロセスに違いがあった。コーヒーの場合はイスラム帝国の首都コンスタンチノーブル（イスタンブール）に伝わり、社交場としての「コーヒー・ハウス」が誕生した。これに対してカートの場合はコーヒーよりもその賞味に手間がかかることもあって手軽に味わうわけにはいかず、「カート・ハウス」のような公共の施設はできずに、個人の家での私的な集まりで楽しむ方向に進んだ。サナアをはじめとする北部イエメンの都市には、他のアラブの国に共通して見られる男たちの社交場としての「コーヒー・ハウス マクハ がほとんど存在しないのは、この社交場としての機能が個人の家での「カート・パーティー」で充足されているからである。

とはいえ、イエメンでもカートが現在ののように国民各層に広く普及し、かつ日常的に消費されるようになったのはそう古い話ではない。一九六二年までの鎖国時代（イマーム統治時代）にはカートは都市の一部の上層階級（イマームをはじめとする貴族階級、大商人）の占有物であり、庶民はイスラムの二大イード（断食明けと巡礼明け）や結婚式などの特別な場合にこれをふるまわれたにすぎない。

カート消費が限定的であつたのは、庶民にカートを買う余裕がなく、またカート栽培もそれほど広範囲には行われていなかったからである。またカートは、イマームが自分の政治に対する不満をそらすために潜在的なライバルであるこれら上層階級の人々に常用を奨励したことで広まったという説もあるもので、そもそも庶民のものではなかつたのだ。農民が自分の家で栽培すれば（栽培に適した土地があれば）自分の消費する分くらいは生産できるが、それはあくまで自給用の穀物を生産した上に余力がある場合に限られていた。またカートなどを栽培していると他の部族からの恰好の略奪対象となつてしまうという危険性もある。したがつて開国以前のカートの消費・生産量はきわめて微々たるものであつたという（ただしこの点に関する統計は存在しない）。

いずれにせよ本格的にカートが普及しはじめるのは一九六二年の革命によつてイマーム支配が打倒され、その後九年にわたつて続いた内戦が終結した七〇年以降のことである。そしてこのカート普及の過程はそのままイエメンの近代化の過程を映し出す鏡なのである。

今日のイエメン経済はカートの存在を抜きにしては語れない。

カート消費は  
なぜ増えたか

カートの習慣は過去三十年くらいの間イエメン全土を覆い、またその消費量も爆発的に増加してきた。カートの習慣がこれほどまでに日常化

したのは消費、生産、そして流通の各側面の相乗作用の結果である。

カートの普及をもたらした最大の要因として、一般庶民の購買力の向上をまずあげなければならぬ。カートは食料ではない。カートを噛むと食欲が減退し、夕食はほとんど食べられなくなるものの、けつして腹の足しになるわけではない。すなわち、ひもじいときにはカートまで手が回らないのである。カートが広く消費されるということは、とりも直さず庶民が少なくとも最低限の食料はまかなえているということなのである。これを可能にしたのはサウジアラビアをはじめとする湾岸諸国への「出稼ぎ」であった。イエメンの農村家庭へ行けば一家に一人や二人はサウジに出稼ぎに行つた息子がいる。とくに一九七〇年代にはイエメンとサウジの賃金水準にはかなりの格差があり、数年サウジで働けばイエメンで一生遊んで暮らせるくらいの稼ぎにはなつた。

こうして稼いできた金を、食料は言うに及ばず、家の新築、ラジカセ、テレビ、ビデオなどの電化製品購入、自動車、自家発電機、井戸用ポンプの購入などに充て、また自身身の婚資に充てて嫁をとつた。こうして生活環境の改善が一巡してしまつてもなお余裕があれば、彼らはこれを貯蓄よりは消費に振り向ける。こうしてカートに対する需要が飛躍的に増大することとなつたのである。

出稼ぎ収入はまた農村に現金収入をもたらしたという点でも重要である。カートは商品作物であり、これを買うためには現金が必要だが、一九七〇年代以前のイエメン農村は自給自足的な地域経済であり、農民の手元にまとまった現金は存在しなかったのである。上述の家電製品などはすべてサウジからの持ち帰りであるから、国内での貨幣の流通は必要ではなく、ひとりカートのみが農村での貨幣流通の媒介者として働いたのである。日常的にカートを嘯む人にとつては一日の最も大きな買い物がかートであることは珍しくない。こうして現在ではイエメン国内の一日の貨幣流通量の三分の一はカートをめぐる金の動きであると言われるにいたつた。

カート生産は、需要をまかなう生産の側面はどうか。イエメンは基本的に農業国であり、国民の大半は農業に従事している。したがつて一九七〇年代のなぜ増えたか、大量の男子出稼ぎ流出は、そのまま農業労働力の不足となつて現れた。

この結果「三ちゃん（かあちゃん、じいちゃん、ばあちゃん）農業」化が進み、痩せた土地、傾斜の急な段々畑など耕作の困難な農地から放棄されはじめ、水の便の良い土地、比較的生産性の高い土地が集中的に耕作されるようになった。この場合二つの条件が満たされねばならない。第一にこれまでよりも少ない耕地面積でこれまでと同等以上の収入になるこ



カート畑。冬の冷害に備えてビニールの覆いをかけるなどの投資をしても、十分に採算が合う。(ダムト近く)

と、第二に労働投入がこれまでよりも少なくてすむことである。そしてカートはこの条件にお誂え向きであった。カートは水さえ定期的に供給でき、ある程度以上の標高があれば土地が多少痩せていても育つ。そして水は出稼ぎの成果としての井戸ポンプのおかげで確保できる。従来の主食用のアワ・ヒエなどの穀物 ドウラと総称されるの栽培が労働集約的であるのに対して、カートは資本集約的な作物であるとも言えよう。労働力が不足し、資本がある程度以上ある人々が穀物生産からカート生産に移行したのはごく当然のことである。

加えて急増する需要を受けてカートの値は上昇を続けたため、カート生産へのシフ

トは魅力的な投資となった。

こうして、需要・供給の両面からカート普及の条件が整ったが、問題は流通である。カートは生鮮商品であり、貯蔵がきかない。理想的には午前中に摘んだ葉をその日の昼下がりには嘯むべきであり（要するに「朝摘み」である）、せいぜい翌日までが賞味期限の限度である。すなわち消費地から半日行程以内でなければ生産地としては不適当なのである。しかしイエメンは国土の大半が急峻な山岳地であり、三〇〇〇メートルを超す山もいくつがある。一方、カート栽培に適するのはこうした交通の悪い山岳地である。伝統的な交通手段であつたロバに依存するならば半日圏はせいぜい二〇キロ内外である。ところが一九七〇年代になると、アラブ産油国をはじめとする諸外国からの援助で山岳地にもアスファルトの幹線道路が急速に整備され、この幹線道路沿いであればどこからでも半日で都市へのアクセスが可能となった。

それだけではない。出稼ぎ土産に持ち帰つた四輪駆動車が農村で活躍し、山奥でカートを栽培してもこの四輪駆動車を用いて幹線道路沿いの町まで運び出すことができるようになった。道路整備と四輪駆動車の相乗効果でカートの生産適地は飛躍的に広がつたのである。現在でも新しいアスファルト道路が一本できるたびにカート畑がこの道路を中心とし

て広がるという傾向は衰えていない。

### カートの弊害

上記三つの側面が互いに影響しあつてカートの生産・消費は現在空前の規模となつている。ただし、最近まで農業統計上カートはいつさい無視されておらず、正確な耕地面積、生産高はわかつていなかったし、GDPの計算にも含まれていなかった。なぜなら、カートの生産・消費に異論を唱える声は少なくないからで、この意味ではカートの生産・流通・消費は公然たる「地下経済」を構成していたのである。これにはいくつもの理由がある。

第一に、ただでさえ労働生産性が低いこの国で、午後をカートの消費で無為に過ごすことは、国家的な経済的損失であるという意見。また、おしゃべりをして安逸に過ごす習慣は勤労倫理の涵養に反するという意見はきわめてよく聞く。もつともこうした「国を嘆く」議論が当のカート・パーティーの場で最も盛り上がるのは皮肉であるが。

第二に、世界銀行をはじめとする外国の経済政策アドバイザーたちは、口を揃えてカートの非経済性、無駄を説き、政府がなんらかの規制措置をとるよう勧告してきた。とくにカートとコーヒーの耕作可能地が同じで（ある程度の高度、適当な日当たり、湿度）あるために外貨獲得手段となりうるコーヒーからカートへの転作が経済的に大きな損失となつて



いるという指摘は事実である。

第三に、政府自身もカートの風習が社会の後進性を示すものとして外国に紹介されることを極度に嫌っており、一九八〇年代までは外国からのテレビ取材には、カート畑の撮影、カートを噛んでいる人物の撮影を禁じるためのインストラクターが同行したものである（もっともこのインストラクター自身はカートを噛んでいたのだが）。現在はこうした情報操作はほとんど行われていないが、それでも「葉っぱ噛み」が興味本位に報じられることは喜んではない。

こうした弊害を自覚するイエメン人も多く、マクロには消費量が増加していく（この点に関する統計はないので数を示すことはできないが、カート畑の面積の増加は誰の眼にも明らかである）なかで、若い世代の知識人、商人等のなかにはカートを噛まない、という人々が少しずつ増えてきている。またカート・パーティーを利用した「根回しの達人」として知られたサレハ大統領も、一九九〇年代後半からは公の場（テレビで放映する場合）ではいっさいカートを噛まないようになり、カート消費抑制を率先垂範している。とはいえ北イエメンでは七〇年代にカート消費を制限しようとした首相が不人気で退陣させられた例もあり、政府が正面きってカートを禁止するという可能性は少ない。

### カートの効用

よそ者や知識人たちから評判の悪いカートであるが、それでもこれだけ普及しているからには、多くの効用があることもまた事実である。

最大の効用は「社会的な潤滑油」としての役割である。カートは冠婚葬祭の場には不可欠な道具立てであり、とくに農村部ではコミュニティを単位とした問題解決、集団行動の決定などのための住民集会にはカートがつきものである。都市でも日常生活において親戚・友人関係のネットワークを維持・強化するために重要な役割を果たしている。

さらにアルコールの代替機能も持つして無視できない。飲酒が禁じられているこの国で、社会的な不満のはけ口として他の国における飲酒の機能を代替していることは過小評価されてはならない。この結果イエメンでは飲酒を原因とする事故や犯罪は少ないし、また、仮に飲酒街などがあれば付随的に発生するであろう性産業の発生、とりわけ女性の性的な搾取の可能性が絶たれているのも、部分的にはカートの存在によるものと言えるかもしれない。なおカートの覚醒作用を原因とする犯罪はほとんどない。

第三に、指摘されることが少ないが重要な効用として、国全体の規模でみた場合の「所得再配分効果」がある。カートの大消費地は都市である。とくに都市の商人・雇用労働者層のニーズは大きい。そして生産地は農村部である。カートの売買を通して、都市から農

村へ貨幣が流れ、結果として相対的に所得水準の高い都市から農村への所得の均てん効果をもたらしているという側面は見逃されてはならない。また農村部から都市への流通の役割は、出稼ぎで持ち帰ったピックアップトラックを元手にした個人営業の運送業者であり、その雇用創出効果もばかにならない。

生産されるものが、例えばバナナなどのように国際的に流通する商品作物であれば外国資本が入ってくる誘因となる。その場合、農民に主食の生産を犠牲にしても商品作物を生産させるいわゆる「飢餓輸出」につながる可能性があり、また国際相場の暴落で農民を困窮に突き落とすこともある。またケシなどの非合法的な麻薬であれば、生産と流通をめぐって非合法組織が跋扈したり、こうした組織にアクセスできるものとできないものとの間に大きな格差を生んだりする可能性がある。その点カートは国内でしか需要されないこと、合法的な（少なくとも国内的に栽培・流通・消費は禁止されていない）農産物であることで、多くの農民にその便益へのアクセスが開かれている。

イエメン山岳部は急峻な斜面を利用した段々畑が多く、大土地所有による大農園は存在しないので、カート生産は基本的に個々の農民が自らの土地で行っている。そしてカートをめぐるお金は国内だけで循環しているので、景気の下支え効果がある。つけ加えれば、

こうして段々畑が保持されている結果、稀少な降雨を最大限活用し、土砂の崩落を防ぐという環境保全効果もあるのだ。

#### カートの今後

統一以前の南イエメン、ハドラマウト州では週末も含めてカートの消費は全面的に禁じられており、この規制は厳格に守られていた。というのも、砂漠と岩山に囲まれた渓谷からなる同州では、カートの生産に適する土地がなく、また山岳部との間にほとんど交通がなかったためにカートが調達できなかったからである。同時に、イエメン山岳部に比べて洗練された文化を誇るハドラマウト人にとって、カートは「遅れた部族民」の因習として軽蔑されていたからでもある。

ハドラマウト出身者 ハドラミー は商才に長けており、サウジアラビアで成功した人も多いし、サナアに住みついている人もいる。サナアにいるハドラミーは同郷意識に基づいたコミュニティを維持しているが、商売上の必要性もあってカートを噛む人も少なくない。ある金曜日、ハドラマウトの特集番組 NHK「アジア発見」一九九七年六月二日放映 をつくるためにやって来た日本からのテレビ取材班と一緒にこのコミュニティのカート・パーティーに参加したことがある。その際、カメラマンがカート・パーティーの様子を撮影しようとしたところ、一斉に「撮影してはいけない」との声が上がった。サ

ナアの人々のカート・パーティーでもこういうことを言う人はいるものだが、たいていは周りの人々の「まあまあ、いいじゃないか」という声に負けて、撮影OKとなることが多いのだが、このときは全員が「ダメ」であった。理由は「カートを嘔むなんて恥ずべきことだから」というものであった。この場合は日本人に見られることよりも、むしろ故郷ハドラマウトの人々に「野蛮な山岳部族民の悪習」に手を染めている姿を見られたくない、という気持ちが頑なに撮影を拒む理由となっていたようで、ハドラマミーの複雑な心境がうかがわれる場面であった。

実際、統一後しばらくはハドラマウトだけはカートのない地域であった。しかし、州知



ハドラマウト渓谷のシバーム。サナア、ティハマのザビードと並んで世界文化遺産に指定されている歴史的都市である。日干し煉瓦づくりの高層建築はまさに「砂漠の摩天楼」である。

事などの行政官はサナアの中央政府の任命で北部イエメンから派遣されてくる。彼らはカートなしの午後の過ごし方を知らない。ニーズがあるところに供給が発生するのは自由経済のならいである。こうして、ハドラマウト渓谷の西のはずれの「カファ」の村に、いつかカート・スークが発生した。

カファはハドラマウトと山岳部イエメンとの間に横たわる広大なラムレイン砂漠の東端に位置する。深夜〇時頃にサナアの南一〇〇キロに位置するダマール、ラダア地域で摘まれたカートが、バイクの荷台に積まれ、砂漠の縁を迂回するルートを夜通し走って、午前十時頃この町に到着するのである。バイク宅配便である。もちろん価格は山岳部イエメンで買うときの三倍くらいになるのはいたしかたない。

インド洋に面したハドラマウトの港町で、現在イエメンの五大都市の一つに数えられるまでに急成長したムカツラの場合はカファからさらに半日以上かかるのでバイク便では間に合わない。ならば空輸である。毎日サナアの空港からカートを抱えた人が飛行機に乗りこむ。カートを運ぶだけの彼の航空運賃はカートの価格に上乗せされて楽々回収できるという仕組みである。なぜ荷物だけ空輸しないか？途中でみんなが噛んだら届く頃にはなくなってしまうからである。

いずれにせよ、カート・パーティーの社会的機能はイエメン社会の根幹を支えるものであるとの認識は誰ももっており、カートなしの社会生活など当面は考えられない。

しかし湾岸諸国におけるブームは去り、出稼ぎもピークを過ぎて出稼ぎ帰り労働者の失業問題がとりざたされはじめた現在、カートのブームにもかげりがみえはじめており、値上がりが続けていた値段も最近では下がることもあるようだ。もちろん一度身についた習慣は、これを支えていた経済的条件が変化したからといって急に元に戻るものではない。イエメンが今後どのような開発の方向をたどるのかは、カートに対する国民の対応がどう変化するかにも大きく左右されるであろう。「カートなしにはイエメンは語れない」のである。